

Title	蒲生氏郷,平將門(露伴學人著, 改造社發行)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.1 (1926. 3) ,p.146- 147
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260300-0147">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260300-0147</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

繪として、(一)八五五年刊和蘭植民大臣より同國王に呈した報告會の口繪「出島蘭館の中に見た長崎港」(二)一五六一年サラゴサ版西譯耶穌會士書翰集の扇を載げ、内容主なるものは書物の堆積、姉崎正治、アリチツジ、ムジヤム圖書陳列目錄並解題、植松安和蘭集の燒残り書目錄、布相永太郎等があり、第二冊に於ては、口繪(一)神宮文庫本古事記裏書、(二)モラエス氏の著書七種があり、内容は、ケンフェル日本誌の邦譯に就て、吉野作造、神宮文庫本古事記裏書について、植松安、津輕藩の北邊警備に關する資料に就て、中道等、日本演劇史研究資料につきて、波多野賢一、メンアス・ピント雜考、ウエンセストラウ・デ・モラエス、日本に關する米國書の内容録、關野真吉等であり、本誌も二三難すべき點あるも、愛書家の座右に供ふべきものであらう。因に書物同好會は、毎月例會を開催してゐる。(神田表神保町一〇坂本書店發行)(一九二六・二・二六、山口昌)

### 蒲生氏郷、平將門(靈伴學人著 改造社發行)

博士の「源頼朝」は我々の何度讀み返しても厭きることのない面白い本であるが、又頼朝を知るにも最上の良書である。「頼朝」に次いで本書も普通史家のとらへることの出来ない性格を巧に描寫して、氏郷、將門の眞面目を我等の眼前に示し、生きた氏郷、將門を充分に理解せしむるものである。

蒲生氏郷に就ては、先づ相手方の伊達政宗の性格より説き初め氏郷の會津に封じられた事情に及び、更に氏郷の性格に就ては、

氏郷は法を執ること極めて嚴峻な人であつたが、他の一面には人を遇するにズバリとした氣持の好い所もあり、又自ら處すること一毫緩急もない。徹底して「武人」の面目を保ち、徹底して「武人」の精神を揮つてゐる。然し尙一方には文雅を喜び、趣味の發達した人であつたと説かれてゐる。氏郷、政宗の關係は、大崎の一揆を中心として、餘す所なくその心理を描寫し、兩英傑の風姿を眼前彷彿せしむる。又秀吉氏郷の關係については、秀吉は氏郷を惡んだ譯ではなく、特に之を愛するには至らず聊か冷かてあつた様に思はれるとなし、秀吉が氏郷を忌んで石田三成と直江兼續の言を用ひ、之に毒茶を飲ましたなど、言ふのは實に忌々しいことである。政宗をさへ羽柴隆興守にして居る太閤が、何て氏郷に毒を飼ふ様な卑劣狭小な心を有たう。太閤はそんなケチな魂を有つた人ではないと斷じ、秀郷毒殺の俗説を否定し、最後に當時英雄豪傑は多くあつたが氏郷の如く朝鮮へ國替を願ふ様な大志を懷ひた者は一人もなく、之が實行されずに終つたことは、氏郷の爲にも、大閤の爲にも、惜んで餘りあることであると結んでゐる。

平將門に於ても實に巧にその性格を生かし心理を解剖して餘す所がない。その上、織田豊洲の辯護説にも、神皇正統記や大日本史の反逆説にも傾かず、その中庸をとられ、「族間の争ひより遂に大罪惡を犯すに至つた経路を面白く記されてゐる。元來此の平將門」は大正九年四月の「改造」に出たものであつて、荒井藤夫氏などは大にこれを推賞し、その著「平將門論」に殆んどその大部をその儘記してゐる程である。勿論平氏系圖によつて將門の父良將とした點や、將門記の讀み違ひと思はるゝ點があらうが、これが

將門の性格を間違つた觀察に導くものではなく、従つて決して本文を傷めるものではない。博士は自ら「其材料を考覈するに於て嚴密足らざる有る也。是れ自ら目して閑人放談の書と爲す所以」であると言明されてゐるが、材料選擇の嚴密なること、史實の正確を得てゐることは言ふまでもない。

「歴史家は歴史家だ、歴史家くさい顔つきはしたくない。傳記家と囚はれて終ふのもうさ。考證家、穿鑿家、古文書いぢり、紙魚の化物と續西遊記に罵られてゐるやうな然様いふ者の眞似もしたくない。さればとて古い人を新らしく捏直して、何の據り處もなく自分勝手な糸を筋氣筋に引張りまはして、變な牽絲傀儡を働かせ、藝術家らしく乙に澄ますのなどは、地下の枯骨に氣の毒で出来ない。おほよそは何かしらに據つて、手製の萬入を無遠慮に加へず、斯様も有つたらうと言ふだけを評釋的に述べて、夜涼の縁側に團扇を揮つて放談するといふ格で語らう」

と博士も言はれてゐる如く、本書は肩の凝る様なものではなく、文章は非常に流麗典雅であつて、一度之を繙けば、興味津々として盡くるところなく、氏郷、將門の面目躍如として眼前に顯はる敢て無二の良書として江湖の一讀を薦むる次第である。(今宮新)

### 教育と御伽の参考古書目録(青木平七編)

近日大阪の百足屋文庫主青木平七氏より前記の書目を惠送せられたが、本書は同氏の長女の高等女學校入學記念として催せられ

た、同氏の多年蒐集にかゝる教育並に御伽に關係する書籍の展覽會目録である。主要なる書籍に就いては簡明な説明を附し、又初に多數の寫眞版を掲げ後學の參考となる有益な書目である。同氏は本書の「はしがき」に於て、我國の女教育に關する書籍に就いて略述せられ居るから參考の爲左に載せて置く。

古へより我國にて子女を教へ導く爲に種々なる書物の梓行あれど、多くは儒書、佛典、歌書の如く、主に身高閣に近き又は一部有學の人達が用書なれば茲に之等を除けば一般童蒙用通俗教科書としては、恐らく室町時代になりし庭訓往來にあらざるか作者は玄慧法師なりと云ひ或は賢慧法師なりと稱へ詳かならざれど、數百年以前よりわが國に消息文體として教科讀本なりしため後、天正八年に至り習字手本帳に大字に刻しあるなど、續いて徳川時代になりて遂に兒童に解し易く畫入りにて刊行し汎く一般寺子屋の教科書となり、又異式類似の百姓往來、番匠往來、商賣往來、西洋往來等を見るに至る、と同時に一方支那文學の影響を受け童子教、實語教、女童子教或は勸引單語編の如きがありし事も見逃し出來ぬなり、また庭訓に因みて教訓の儀禮書盛んに世に出てたり即ち諸禮集、小笠原大禮其他女重寶記、男重寶記、嫁娶調法記などとす、之等の躰方は上は堂上大名小名より次第に富有の町家に移り、中流家庭の儀禮の範となり終に普通家庭の身分に應じ幼童よりの起居動作を教ゆる習慣性を作りぬ、亦徳川末期に至り西洋諸國と通商條約ありしより世は一轉して泰西に關する研究となり、翻譯書となり語學書となり遂に王政復古明治二年茲に小學校令が發布されて愈々文部省編